

二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版



小説 上田ながの

挿絵 2号

第一章	蒼い海の槍	006
第二章	呪いの魔術	037
第三章	敗北の女海賊	060
第四章	船倉の悪夢	104
第五章	乾く身体	135
第六章	シャロツテの雌伏	168
第七章	二人の分離	192
第八章	海に沈む	224
終章	蒼い海への船出	249

## 登場人物紹介

Characters



### ノア＝ノ＝アノ＝ア

海賊団『蒼海の槍』の下っ端少女水夫。

### シャロット＝ハイレディン

『蒼海の槍』の先代船長。

### アルービア＝ホーキングズ

『蒼海の槍』副長。

### バル＝バロス

シャロットに苦汁を舐めさせられてきた海賊団の頭領。

### メツアク

政府の高官。

そんな女海賊の異常事態に、これまで片膝をついたままでいたバルが、口元に笑みを浮かべながら立ち上がった。巨体が日の光を受け影を作る。ノアの身体は簡単にその中に呑み込まれてしまった。

敵のカトラスが喉元に突きつけられる。

圧倒的に優位な状況に立ち、ニタニタ笑う男。こちらの神経を逆撫でしてくる。見てい  
るだけで、胸がムカムカとしてきた。

(だ、駄目だ……こ、こんな奴に負けられない……)

船長との繋がりがどうなっているのか分からないが、身体の支配権は自分にある。負けられない！

決意と共にバルを鋭い視線で睨みつけた。

今の自分はドジで間抜けな下っ端海賊などではない。『蒼海の槍』を率いる伝説の船長なのだ。

「くく……まさかこんな所でお前に会う事になるとはなあ。生きていてくれたとは嬉しいよ、シャロットェ！」

バルが船長の名前を叫んだ。なにやら船長との間に因縁があるようだ。

「覚えてるだろ？ この傷。俺はさあ、お前に復讐する事をずっと夢見てきたんだよ」  
げたげたと髭面男は笑う。顔についた傷跡を、指でなぞった。

「お前さあ、自分の身に何が起こっているのか分かってるか？ 分かんないだろうなあ。」

しかし、俺は優しい男だから、お前の疑問にも答えてやるよ。なあに簡単な事だ……今日お前が食った物の中に、痺れ薬を混ぜておいてやったんだ。くく、なんせお前の戦闘能力は異常だからな。これまで何度か知ってる連中をけしかけてみたが、全部返り討ちにしてやがる」

奴隸商人や魔術師の乗った船。あれらはすべて自分の手の者だと、バルは笑いながら告げる。

「……しよ、食事に痺れ薬って……」

今日食べたカレーの事を思い出す。あそこに入れられた薬のせいで、身体を動かす事ができなくなっている。シャロツテと意思疎通ができないのも、その副作用かもしれない。

同時にメアリの少し眠そうな笑顔が、脳裏に思い浮かんできた。

「お、どうやら想像ついたみたいだな。残念ながらそういう事だ。メアリ！ボニーあいつは俺がお前らの中に潜り込ませたスパイだったってわけだ。正面からお前みたいなのとやりあっても、絶対に勝ち目はないからな。だからさあ。お前が力を発揮できないようにしてやったんだよ」

奴隸商人からしてバルの仲間だったと考えれば、救われた時点から彼女は敵のスパイだったという事になる。少女の心は激しく動揺した。ぐらぐらと独眼の視界が揺れる。ただ、敵に対してアイパッチの秘密や、こちらの正体を語ってはいないようだった。それに自分以外の仲間に、薬を盛ってはいないようである。それがメアリの良心だと、信じたい。

女海賊の動揺をバルは嬉しそうに見つめながら、パチンツと指を鳴らした。すると『バルバロス海賊団』のクルーが走り寄ってきてノアを取り囲む。彼らの手には縄が握られており、こちらの身体を縛り始める。

「お、柔らかいな〜」

「ハアハア、やつばいい身体だ」

「ちよつとコートが邪魔だな」

男達は顔を喜色に染めながら、手際よく作業を進めていく。コートは剥ぎ取られてしまい、床に敷かれる。

「く、こ……この！ や、やめろ！ ぼ——あたしの身体に触れるな！」

もがき、拘束から脱しようとする。シャロツテ、『蒼海の槍』に敗北は許されない。

しかし、痺れた身体での抵抗には限界がある。普段であれば片手を振るだけでも吹き飛ばせる相手に、いいように押さえつけられてしまう。腕や足を振り回し、指に噛みつこうとする。

「この野郎。暴れるんじゃねえよ！」

ジタバタもがくノアの頬に、敵から平手打ちが飛んだ。

パンツ！

乾いた音が鳴り響き、続いて痛みが走る。これに対してほとんど抵抗できない自分が悔しい。

これといった反撃もできぬまま、身動き一つ取れないよう縛りつけられてしまった。縄が身体に喰い込んでくる。逃れようともがけばもがくほど、締めつけが増していく。両手足は背中で纏められる。バランスを取る事ができず、身体は甲板上に仰向けに寝かされた。

「ぐ、う……ああ、い、痛い！ やめ、やめろ！」

肌を喰い込む縄が、キリキリと身体を締めつけて痛みが走る。苦痛の呻き声を上げると、より力を込めてロープを引っ張ってきた。

「おいおい、見ろよこのオッパイ！」

胸の谷間に通されたロープのせいで、ただでさえ大きな双丘が、男達の視線を惹きつけるように強調させられる。強烈な締めつけで、服を引き千切らんばかりに胸が張り出し、先端の丸い豆のような突起がポツリと服に浮かぶ。バルを始めとする敵は、そんな光景に瞳を細め、下衆な笑い声を上げた。

憧れていたカッコイイ大人の姿。自分がなりたかった理想の体型だというのに、今感じるものは屈辱しかない。女を前面に押し出した姿。向けられる視線に顔が熱くなる。視線から逃れようとしても、手足は身体の下だ。動こうとするだけで、どうしても胸を突き出すような形になってしまう。

「お、お前ら一体何をするつもりだ!？」

結局いつまで経っても体勢を整える事はできず、ノアは戦法を切り替えた。殺気を込め

た言葉を敵に向かつて解き放つ。ただ、慣れない行為の為あまり迫力はなく、当然敵が行動を止める事はなかった。

「何って——だからいったろ！ 傷の復讐だよ」

一度言葉を止めると、髭面男は舌を伸ばして自分の唇を舐める。同時に向けられるねつとりとした視線に、ゾクゾクッと震えが起こる。

「俺は本当にお前が憎いんだ。いつか必ず犯して、犯して、犯しまくってやろうと思つてたんだよ。それがわけの分からない所で死んだとか話を聞いて……どれだけ俺が落胆した事か。それがさあ、前に一度お前を見て……まあ、こんな所で話を続けていてもしょうがないな。たつぷりお前で楽しんでやるよ。おい！」

言うなりバルは隣に立つ部下に向かつて片手を突き出す。すると一つの壺が渡された。茶色い小さな壺である。

正体不明のソレに言いようのない不安を感じ、縄で拘束されたまま逃げようとした。しかし芋虫のように纏められた身体では、ほとんど動きを取る事もできない。

無駄な抵抗を男がニタニタ笑う。悔しさだけが大きくなっていく。

（駄目だよ。諦めるな。たとえ動けなくても、諦めさえしなければきつと……）

膨れ上がる悔しさを振り払うように、独眼に精一杯の気持ちを込めて敵を睨みつけた。

「その目だ。意志の強い瞳……好きだなあそういう目。だがな、それ以上に好きなのは、そんな意志の光が消えていくところなんだよ」



嬉しそうに口元を歪ませると、髭面の巨漢は身体の上で壺を傾ける。蓋がない入れ物の中から、トロトロとした液体が垂れ流れてきた。

ピチュリと服の上に到達した粘着液が、身体のラインに沿って流れていく。身体を這う気色悪い感触が伝わってくる。服の隙間から、直接肌にも絡みついてきた。冷たく、ヌメヌメとしているのが不快感を催させた。

「何だ……なんだこれ？」

あまりの気色悪さに、声を上げてしまう。バルにはそれが嬉しいらしい。笑いで肩を揺らしながら、視線で部下に指示を送った。

指示を出された男達は、再び縄で縛った時のようにこちらの周囲を取り囲み、転がる身体に手を伸ばしてくる。

腕が肉体に触れた。柔肌に太い指がぐにゅりと喰い込む。太股に掌が張りついた。男達の体温が伝わってくる。

「な、や、やめっ！ さわ、触らないで！」

悲鳴を上げるが、敵は止まってくれない。むしろ声を上げる度、好色そうに顔を歪める。彼らは息を荒くしながら、身体を濡らす粘着液に触れると、女海賊の全身を満遍なく濡らす為に、液体を伸ばし始めた。

臀部に溜まる液体を上半身、下半身へと塗りたくっていく。手の動きは乱暴ではなく、優しいソフトタッチ。スパッツの上から下半身を撫で擦る。

(こんなの……ヤダ)

手の感触と染みてくる液体の感触。普段の自分ではありえない違和感。敵の男に全身を汚されていくようなおぞましき。

粘液を肌に馴染ませるように、ゆっくりゆっくり引き伸ばす。スパッツに隠された左足。剥き出しになった右太股。伸びやかな白い腕。グチャグチャ湿った音が立つ。男達の手が肌の上を這い回る度、ヒクンヒクンッと身体が震えた。

「ん、んふ……」

息が漏れてしまう。

硬くゴツゴツとした男達の掌の感触が伝わってくる。肌やスパッツの上にそれを感じ、神経がチリチリ焼かれるような気がした。体温が上がり、頭がフラフラする。上気した頬が、肌に脂ぎった指の刺激を受ける度、ピクピク痙攣した。こちらが動けない事をいい事に、男達は女海賊の身体を好きなように弄ぶ。

腰を撫でていたかと思うと、腕を胸へと回してきた。縄によって強調された二つの丘。伸びてきた手が、捏ねるように乳房を揉み始める。同時に胸根から胸先へと満遍なく液体を塗り込んでいく。乳根に巻きつけた手を、乳でも搾り出そうとするかのようにムニムニと動かしてきた。掌中に入りきらないほどの巨乳は、粘土のように容易に形を変える。

「く、う、う……ふうっ」

胸を捏ねくり回される度、じわじわとした奇妙な感覚が身体の芯から湧き上がってくる



ような気がした。正体は分からないが、胸を揉まれ、葉を塗り込まれていくごとに、感覚は強くなり、息も漏れ出てしまう。肉体が熱くなってくる。皮膚からはじんわりと汗が染み出て、液体と混ざり合った。

服の先にポツリと浮き出た乳首。伸びてきた人差し指と親指が、その小さな豆を摘み、指の間で転がした。

「やっ！ ひんっ！ だ、駄目！ や、やめて！」

摘まれた途端、ピリッピリッと痺れるような刺激が走る。男の自慰をした時とは違う感覚。初めての女の快楽だった。

「お、何だ？もしかして感じてるのか？」

乳首を摘まれ、胸を捏ねられる度にピクピク身体を震わせていると、男の一人が挑発するような言葉を向けてきた。

「そ、そんな事……ぼ……あ、あたしは負けない！お前らなんかにはやられて堪るか！」

ギリッとノアは奥歯を噛む。ただ、頬は桜色に染まり、瞳は潤んでしまっている。はあはあと口からは抑えきれない吐息が漏れ、敵を喜ばせてしまう。

「大変勇ましいですなあ。さして、そんな船長さんの大事な部分にも、たっぷりお葉を塗ってあげないとなあ」

身体に取りつく男はそう言って笑うと、掌にたっぷり葉を取った。別な男達が曲がった膝に手をかけ、ただでさえ開きかけている膝を、更に力を込めて左右に引っ張る。スパッ

ツで隠れてはいるものの、男達の目の前に少女の股間が大きく開かれる。

「おい、この黒いスパッツ……ちよつと染みてるぞ。もしかして濡れてるのか？」

「なっ!? そ、そんな事あるか！」

「へえ、じゃあ確かめてみないとな」

粘着液に濡れる手が、秘部へと伸びた。

……くちゅり。

「んっ！」

別段触れる指に力が籠っていたわけではない。直接触れたわけでもない。だというのに、スパッツの上から秘部に触れられた途端、電気のようなものが全身を駆け巡る。縛られた指が、ヒクツと跳ねた。

「あれ？ 感じちゃってる？」

僅かな反応も見逃さず、嘲るような言葉を向けてくる。

「そ……はっああっ……そんなわけ……あるか……んんっ」

否定の言葉を口にするのだが、その途中で男の腕が動き始めた。ゆったりした動きで、恥丘をなぞるように葉を広げていく。まるで宝でも扱っているかのような繊細な手の動きで、丹念にスパッツに液体を染み込ませてくる。

「あっ——んくっ……はあはあ……なに……これ……」

ププニと男の指が恥肉を押し。黒いスパッツ上に、くつきりとワレメが浮かび上がっ

てしまった。指がそんな秘裂をなぞる。布がワレメに喰い込み、湿った感触が秘肉に伝わってきた。脳髓を溶かそうとするかのような感覚に、思わず疑問の声を上げてしまう。

「くく、大分ここにも染み込んだなあ」

彼らはニタニタ笑いながら、更に液体を全身に広げていく。子分どもは船長から壺を受け取ると、首筋から服の背中や、ブーツの中にまで液体を流し込んできた。

全身がベタベタとした気色悪い感覚に包まれる。

「さて、そろそろ仕上げといくか」

ここで指示を下していただけのバルが、部下達を押しつけて壺を再び手に取ると、まだ中に残っている液体を自ら口を含む。

そのまま手で部下を促す。すると手下達は転がっていたノアの身体を抱き上げた。

「な、何をする気だ！ は、離せよ！ 汚い手で触るな！」

もがく——だが、抵抗には限界がある。強力な女海賊の姿は、まるで小動物のようだった。

そんなノアの顎をゴツゴツしたバルの手が掴む。イヤイヤと振っていた首が、固定されてしまった。

「美味そうな唇だ」

バルはだらだら口から垂れ流れる液体を気にせず笑うと、そのままノアの唇に髭に覆われた小汚い唇を重ねてきた。

「んむうっ！」

一瞬驚きで瞳が見開かれる。少女にとつて初めてのキスだった。

（や、やだ……こんな奴。こんな奴に……）

いつか好きな人と——夢見ていた口付け。その相手は臭い髭面男。しかも、不意をつかれて開いていた口腔内に敵の舌が入り込んでくる。

憎むべき敵の体温が、重なった唇から伝わってきた。バルの酒臭い息が流れ込んでくる。チクチクと顔に刺さる髭の感触が、更に気持ち悪さを際立たせた。夢見ていた幸せなキスとは程遠い。感じるのは嫌悪感だけだった。

「もふう……んも、んもうっ！」

慌てて唇を閉じて侵入を防ごうとするのだが、口にも上手く力を込める事ができない上、バルの口がこちらの動きを制してくる。

顔に比例するように太く、長い舌が、ノアの小さな舌に蛇のように絡みついてきた。グチュグチュと音を立てながら、口腔を吸ってくる。舌が根元から引き抜かれるのではないかと思うほどの吸引力。

「もふ、ふもっふう……」

口腔を蹂躪されているだけで頭の中がぼうつとしてくる。女などただ犯すだけの道具としか考えていなさそうな男だというのに、舌の動きは細かく、感じさせられてしまう。霞がかかったように、ふわふわと思考が浮つき——、

「んもふう！」

その瞬間、口腔の流れが変わった。吸われていた口腔に、大量の液体が流れ込んでくる。先程バルが口に含まれた液体だった。液の量の多さに、口の中はすぐにいっぱいになってしまふ。息が詰まる為、流される液を喉奥に飲み込むしかなかった。

「げほっ、げほおっ！」

唇という蓋が離れると、何度も咳き込み、流し込まれたものを吐き出す。それでも敵は解放してくれない。舌を伸ばし、顔を舐め始めた。男の唾液と例の液体が混ざり合ったものが、顔中を染め上げていく。

「は、離せ！ 臭い！ 臭いんだよ！」

気色悪い口腔の感触に耐えながら、敵を罵った。鼻をつく匂いで、眉根に皺が寄る。

が、どれだけ嫌がっても解放される事はなかった。顔全体が液体でべとべとになるまで続けられたのである。眼帯も粘液と唾液でネットリ汚れる。

男達が女海賊の身体から離れた時には、既に身体中で濡れていない場所などなかった。ゼリーの風呂にでも入ったみたいなのに、異様な感触が肌を包んでいるのが分かる。濡れた衣服がベッタリと張りつき、身体のラインをくつきりと浮き立たせる。勃起してしまっている乳首や、股間の筋が浮き上がって見えてしまっていた。

気色悪さと、いいようにされた屈辱。無力な自分に対する怒りがノアの心に広がっている。だが、少女は自分の想いを表に出す事なく、気丈に敵を睨みつけ続けた。ただ、上気



した頬や潤んだ瞳によって、かなり迫力に欠ける。

(船長は絶対に諦めない)

意識が途切れたままの船長であるが、少女を支えているのは彼女の存在である。

「……こ、これがなんだっていうんだ。お、お前らは……あたしが絶対にやつつけてやるんだ」

はあはあと息を荒くしながら、それでも敵を威嚇する。

「くく、さすが心が強い。だがなあ、今のは前戯に過ぎない。本番はここからだぞ」

喉奥から搾り出すように出したノアの精一杯の言葉に対し、バルは手を叩くと再び部下に目配せをした。

すると男達は女海賊を甲板にうつ伏せにして寝かせる。床に胸が押しつけられ、餅のように形を変えた。周囲の敵から歓声が上がる。屈辱以外の何ものでもなかったが、唯一の救いは仲間達が気絶している事だった。情けない姿を見られないで済む。

敵は新たな縄を取り出すと、両手足を背中で纏めて縛った縄にそれを巻きつけた。かなり太く長い縄である。ただし、こちらを直接縛るような真似はしなかった。意図が掴みにくい行動であり、思わず答えを尋ねるようにバルの顔を見てしまう。

「そんなに心配そうな顔をする必要はないさ。なあに、簡単な事だ。我々は海上に生きる者だぞ。海の民にとっては当たり前前の事だが、お前だって釣りは好きだろ？」

「——え？」



更に体内に蠢くものがある。ヒクヒクと痙攣するように動くもの。感じるのは尻の穴。

「うぐっ！ ふうぐ……」

敵によって尻穴に入れられたものが動き、腸壁を擦り上げる。排泄器官への逆注入は、苦しみ以外の何ものでもない。

肛門に突き入れられたものが、狭い腸内で必死になって暴れる。滑る侵入者の冷たい体表が、柔らかな腸壁を押し広げていく。尻の穴が拡張される。女海賊の下腹部は、パンパンに膨れていた。

内部からの圧力で、今にも張り裂けてしまいそうなほどの痛みを感じる。ブーツを履いた足が苦しみの為か、痙攣するように動く。

「んく……んひっ！」

ただ、漏れ出る呻き声には、甘い吐息も僅かに混ざっていた。

感じるものは苦しみだけ。そのはずだったのに、快楽の刺激を覚えさせられている肉体は、痛みも快楽に変えようとする。

異物が腸内いっぱい詰り込まれていた。挿入りきらなかった尾が、臀部の間から少しだけ飛び出していた。思い出したかのように時折震える。

「ほぐうっ！ うあっ、うあっ……うご、動くな……」

言葉投げかけたところで、通じない。

挿入されているものは冷たい魚。普通では絶対にありえない異物の存在に、ぎゅると

腹が鳴る。ただでさえ数日間我慢していた。腹の中で暴れ回られ、キリキリと刺激が走る。腹が決壊しそうになった。

(だ、駄目だ！ 耐えろお！)

大勢の視線が自分に集中している。人として漏らす事など死んでもできない。ぎゅるる。

はつきりと耳にまで届く音。下腹部が張り詰めていく。

(こ……このままじゃ)

排泄欲の高まりを感じる。括約筋に自然と力が籠る。漏らすわけにはいかない。その強い想像だけで耐え続ける。

(あ、あたし……あたしは、あたしはシャ、シャロツテ……シャロツテハイレディンだ！ こ、こんな……この程度の事……)

「ん、んく……んく！ んんほおうっ！」

揺れる旗。蠢く魚。二種の陵辱が女海賊を嘲笑う。

終わらない肛虐によって、魚の尾が飛び出ている肛門がヒクつく。痙攣する菊門は、呼吸でもしているかのように、大きくなったり小さくなったりしていた。

(た、耐えないと。あ、あたしはノアノアの為にも、ぜ、絶対に耐えないといけないんだ) だが、無意識のうちに助けを求めるといふような視線を、甲板上の敵に対して向けてしまう。

多分バルは気がついてるのだろう。一瞬口元を歪めて笑う。反応はそれだけだった。

それ以降はこちらの存在を無視して魔船を入港させる。

棧橋に橋が渡される。すると、港で船を待っていた政府高官が乗り込んできた。

「いや、今回は実にご苦勞な事であつた。それにしても、本当に『蒼海の槍』を捕らえるとは、さすがバルバロスである」

勞をねぎらうメツアクの言葉に、髭面男は恭しく頭を下げてみせる。『バルバロス海賊団』と政府の癒着を知っている者の目からすれば、茶番以外の何ものでもない。

本来であれば、両者の間に割って入って叩き伏せてやりたいところであるが、現状ではそんな余裕はまったくない。湧き上がってくる便意と、風によつて与えられる肉棒への刺激——二つを耐え続けるだけで精一杯だつた。額には玉のような汗が浮かぶ。

(あ、あいつらこれから……な、なにをさせるつもりだ……う、ぐう……)

思考能力が奪われた状況では、敵の企みを察する事などできない。

「で、アレは何だ？」

太り気味のメツアクが、縛りつけられている女海賊を指差してくる。

「ああ、アレですか。アレはですねえ、いわゆる見せしめです。悪を働いた者がどうなるか、それを民草どもに知らしめてやらねばなりませんからね。ですから、メツアク様のほうからぜひとも……」

バルは舌なめずりをしながら笑う。それ以上詳しい事は口に出さなかったが、メツアクには意味が通じたらしい。彼は甲板上から港に集まった民を振り返ると、大きく口を開い

た。誇らしげな表情。俺を見る！ と無言で告げてくるような顔だった。

「民の諸君！ 我々は長年追い続けてきた憎むべき海賊団『蒼海の槍』を捕らえることに遂に成功した。今までの罪から、これより流刑島エンドーレスイリユジョン送りに処す事にする。ただ、その前にこの海賊団を義賊だと抜かす輩に、いかにこの連中が破廉恥であるかを見せてやろう。さあ、皆の者見よ！ ここに縛られた愚かな女を見るのだ！」

演説によつて、もともと視線を向けていた者はもちろん、女海賊の痛々しさに視線を逸らしていた者まで、釣られるようにしてこちらを見つめてきた。

一斉に集まる視線。『蒼海の槍』を支持するしないにかかわらず、胸や秘部を露出したあられもない姿に、どうしても視線の中に熱いものが混ざる。多人数による視姦。手を出される事はないが、恥辱感で体温が上がっていく。熱気は股間にまで集まり、ビクンビクンと恥知らずなまでにペニスが反応を見せる。

（み、見られてるだけだ。な、何をされるわけじゃない。この程度の事、こ、これまでの修羅場を思い出せば……な、なんて事はないはずだろ）

自分自身が歩んできた道を思い出す。  
ぎゅるる。

しかし、再び鳴ってしまう腹の音。更にタイミングよく潮風が吹き、旗を揺らした。

「ほほうっ！」

無意識のうちに上げてしまう嬌声。肉茎に喰い込む縄が少しずれ、肉肌を擦り上げる。

もどかしくも気持ちのよい感触が、ゾクゾクと駆け上がった。改めて心に刻みつけようとしていた強い意志が、一瞬で蕩けてしまう。陵辱を耐え抜こうという心が、全身を駆け巡る快樂と混ざり、溶け合おうとする。身体を固定されたまま、無意識のうちに腰を突き出していた。

(だ、駄目だ！)

不意を突くような形で与えられた快樂に、一瞬心が墮ちかけてしまった。慌てて気を引き締める。少しでも油断すれば、直腸で暴れている魚達を、外へと放出してしまいそうになってしまう為だ。そんな痴態を人々の前に晒す事などできない。ヒクヒクと肛門が痙攣する。全神経を下半身へと集中させ、漏れ出る事がないように努めた。

漏らすかと思つたのに、ギリギリのところで耐えている女海賊の姿に、敵海賊は残念そうに肩を竦めてみせる。

「あ、あたしはき、貴様ら……く、うう……な、などにはぜ……絶対に屈しない……ん、おほう……くっし……て……堪るか！」

便意を耐えながら、搾り出すように怒鳴りつけた。

「ほう、そうか。それならそこにいればいい。ただ一言、便所に行かせてくれと頼むんであれば、俺だつて鬼じゃないからな。行かせてやる事も考えたのに。お前がそういう態度に出るのなら、仕方ないな」

溜息交じりのバルの言葉。人を苦しませ、辱める事しか考えていない奴に馬鹿にされる

悔しさに、奥歯を噛み締めていると、

「なあ、あの女の尻のところ……」

という声が聞こえてきた。

思わずシャロツテは身体を硬直させる。

「何だ？ あ、本当だ。何か見えるぞ……アレって、魚の尾か？」

人々がざわめき始めた。

確かに正面には旗があり、尻部は柱に固定されている為見え難くはあるとはいえ、完全に隠れているというわけでもない。目がいい人間であれば気がつく事はできる。

(き、気付かれた!?)

最も隠し通さなければならぬ事実を見られてしまった。ドキリと胸が鳴り、一瞬の内に全身から脂汗が湧き出る。尻に集まる視線。ぷつぷつと臀部からも汗が染み出した。肛門に力が入り、思わず内部のものを締めつけてしまう。

「でもなんで尻の穴に魚が？ まさか尻に突っ込んでるのか？」

「まさかあ。そんなの人としてできる事じゃないだろ」

彼らの言葉に悪意はない。ないのだが、一言一言が刃のように心に突き刺さる。

罵倒の言葉。嘲りの言葉。心と身体に染み込む言葉。

「ん、く……いうな……はあはあ……いうなあ」

馬鹿にされているというのに、言葉が耳に届く度、ガチガチに勃起した肉棒が縄に縛ら



れたまま痙攣し、女の部分は湿り気を帯びていく。肉褌の一枚一枚に、愛液が絡まっていく。自分自身の発情臭が、鼻に届いた。溶けたチーズのような匂いだった。

（何でだ。何でだよ……）

意思に反して昂ぶってしまう肉体。心ない言葉を受ける度、身体が反応を示してしまう。何も知らない人々が、恨めしかった。ちらりとそんな感情が頭を過ぎり、慌ててそれを否定する。ここに集まった人々には何の罪もない。

（いいか、こ、ここは……たえ、耐えて、逆転のちゃ、チャンスをま、まち……んふっ！ くあっ！）

魚がパクパクと口を動かし、腸壁に吸いついてくる。腸肉が吸引を受ける事によって盛り上がった。口先がチクチク肉に突き刺さる刺激に、臀部が痙攣し続ける。

括約筋が一瞬緩みそうになってしまい、慌てて力を入れ直す。

ブビッ！

「ッ！」

しかし、はしたない音が周囲に響き渡ってしまう。

「おい、今の音」

「オナラだよな。マジかよ……普通こんな所でできるか？」

放屁と共に、腸液が噴き出す。容赦ない男達の言葉が、耳に届いた。

自分の能力を初めて恨めしく感じる。どんなに遠くにあっても聞こえてしまう声。耳に

届く嘲り声により、尻の感覚がより敏感になる。魚の呼吸に合わせて動く鱗の一枚一枚までが、腸壁を撫で擦る。カリカリ引つ搔いてくるような感覚に、女海賊の表情はだらしなく崩れる。

既に菊門の周囲は汗でべったりと濡れていた。肛門から突き出る尾を伝って、腸液まで流れ出てきてしまう。

シャロットの顔は青褪めている。ふうふうと口から漏れる息も荒い。

(ん、くふ、うあああ……も、もう……だ、駄目。あたしは、あたしは……)

肉体は限界を迎えようとしていた。高まる排泄欲が、最後の理性を押し包んでいく。

(出る！ 出てしまうっ！ こんな、こんな場所であたし——あたしが!?)

滲み出る脂汗。好奇の視線を向け続けてくる大衆。彼らの目の前ではしたなく腹に詰め込まれた魚と、大便が同時に噴き出る様が容易に想像できた。

残された最後の理性が悲鳴を上げる。

(……こ、ここであ、あたしが漏らしたら……そ、『蒼海の槍』の名に、き、傷がつく……)

心に言い訳が生まれる。

もう肛門は限界だった。

(み、皆に恥をかかすわけには……い、いかな……いい……)

仲間のためという思いが、シャロットの免罪符となる。一度奥歯を強く噛み——。

「た……おほっ！ たのっむ……あ、あたし……あつたしを、も、もう……お、おろし、下ろして……」

死にたいほど、情けない敵に対しての懇願を口にしていた。

(み、皆の為なんだ……)

心中で言い訳を繰り返す。

「駄目だ。少し頼むのが遅いな！」

が、バルはシャロット渾身の懇願を、たった一言で切り捨てる。もともとこちらの頼みなど、聞く気がなかったという表情。完全に馬鹿にした表情。

(……そ、そんな……)

矜持をかなぐり捨ててまでの懇願は、すべて無意味だった。心の中に絶望感が去来する。これまでにない突風が吹いたのは、その瞬間の事だった。

吹きつける風の強さに、旗が飛ばされそうになる。縛りつけられたペニスを、根元から引き抜こうという勢い。ギチギチと縄が肉茎上を移動する。

「ほ、ほあぁっ！ だ、ダメッ！ ひ、ひぎいっ！ おっおっおっおっ！ で、出る！ うあぁ！ だ、駄目だ！」

限界に達していた肛門。直腸がキュッキュッと引き締まり、圧迫された魚達が激しく暴れ出す。なんとか括約筋で蓋をしようと頑張ったのだが、肛門から尾を突き出していた魚が、暴れ馬の如く全身をビチビチッと震わせた。腸内の粘膜組織を撫で回る鱗が、疼く官

能を掻き混ぜる。出してはならないという理性を、肉の快楽が押し潰していく。

恥ずかしいという思い。苦しみから解放されたいという思い。二つの相反する思いが綯い交ぜになる。

「だ——うっ、うほうっ！ み、見るな！ み、みみ、皆！ み、見ないで！ 目を閉じ——っく、ほおっ！」

筋肉が弛緩する。必死に引き締めていた穴が開いていった。腸が何度も収縮する。体内の奥の奥から、溜まっていた色々なものが流れ出てこようとするのがはっきりと分かる。

(分かっている。分かっているんだあ！)

最後の理性で決壊を防ぐ。湧き上がる排泄欲を抑え続けようとする。

(うあっ！ うああああっ！ も、もう、もううっ！)

ムズムズと股間に感じるもどかしさ。意志だけではどうにもできない巨大な流れが、腸から肛門に向かって突き進んでくる。

止められない。最早自分だけではどうする事もできない。溜め続けたものが爆発しようとする。耐える為に硬直させていた身体にブルッと震えが走り、次の瞬間には全身から力が抜けていった。脱力感が全身を包み込み——。

「ひぐっ！ 出る！ ほうあひいっ！ でっるう！ うあっ、うああああっ！」

ぶしゃっ！ ぶりゆりゆりゆ、ぶじゅう！ ぶり、ぶりりりいっ！

耳を塞ぎたくなるような音が辺り一带に響き渡る。まるで堤防が決壊した川のような勢

いで、尻穴から溜めに溜めたものが噴出した。

「ほうああ！ で、出てる！ あ、あたしが、このあたしがあつ！」

伝説の女海賊といわれた自分。向かうところ敵なしだった自分。これまでの自分がすべて崩れ落ちていくような錯覚が広がっていく。

開ききった肛門からは、詰められた魚と共に、これまで数日間我慢してきたものが放たれていた。

ぶりっ！ ぶりぶり！ ぶっぴいっ！

耐え続け、我慢し続けたものが噴水のように流れ出ていく。汚物が見張り台から甲板へと弧を描いて飛び散っていった。汚物が腸壁を擦りながら出ていく感覚に、独眼が白目を剥く。

「ひぎっ！ ひああ！ 出して、こんあ、こんあ！ 酷い、酷いのに、酷いのにひいっ！」

解放感が身体を包む。悔しいのに、辛いのに——直腸を流れ、肛門から排泄物が噴出し続けるのが何にも増して気持ちがいい。

「……おいおいマジかよ。漏らしてるぜ」

「さ、最悪……何か見てるだけで気持ち悪い……」

「しかも見ろよ。クソ漏らしながら、ピンピンにチンコ勃起させてやがる……」

口々に言葉が飛び出る。彼らの中には、まるでゴミでも見るかのように冷たい視線を投げかける者もいれば、驚きで呆気に取られている者、絶句している者、興奮して自らの股

間に手を伸ばしている者までいた。様々な反応。唯一共通しているのは、全員女海賊の痴態を見続けているという事だけだった。

汚物を漏らしながらも、聞こえる言葉通りペニスはますます硬直していく。

「み、見るな！ ほひいっ！ まだ、まだ出る！ 見るなあ！」

プシュッ！ ジョジョオオッ！

突き刺さる視線が痛い。と同時に、思考を痺れさせ、身体を痙攣させる快楽を押し上げる。震える指先、半分白目を剥いてしまう独眼。桜色に紅潮した肌。ひいひいと悲鳴を上げるシャロツテの思考が、官能の波に呑み込まれていく。

肛門がヒクつく。排泄の気持ちよさが、ペニスの性感まで高めていく。

「ひぎっ！ だあめえ！ やあつ！ な、なにか、なにかくるうっ！」

下腹部から肉先に向かって何かが湧き上がってくる。

（駄目だあ！ これ以上は、これ以上……）

情けない姿は見せられない。耐えようと歯を喰い縛ったが、肉体は限界に達していた。

（あ、ああああ……も、もうっもううううっ！）

糸が切れ、一瞬意識が遠くに飛び――。

「ひぐっ！ てる！ 何かで、てるうっ！ う、うああああ！」

どびゅっ！ どびゆるうっ！ どぶぶぶうっ！

全身を押し包む肉の快楽は、牝だけでなく牡の絶頂まで女海賊の身体にもたらず。肉竿



に旗を巻きつけたまま何度もペニスは痙攣し、白濁液を吐き出した。飛び散った液体は海賊旗に纏わりつく。

「ふわあああつ！ で、射精てるうっ！ あ、あたっし、あたっしがあつ！ 前と、後ろから射精てるうっ！ 男の、男のものなんかをつ！ ひいっ！ ま、またっ！ まだ、まだイクッ！ 射精して、出して、いぐううううっ！」

ビュッ！ ビュッ！ プッシュアアッ！

蜜壺から愛液が噴射された。

肛門、肉棒、膣——三つの穴から、液体が撃ち出される。イカのような匂いと発酵したような愛液の匂い。そして排泄物の匂い。様々な匂いが混ざり合い、女海賊の鼻をつく。

「くさひ、くさひいっ！ あたし、あたしが臭い！ ふあ、ふあああつ！」

身体から力が抜ける。強烈な脱力感が広がっていった。頭の中が真っ白になり、筋肉が弛緩していく。

「ひあつ、ひああああ……止まらない……とまらないひい……」

流れ続ける液体が、足元に溜まる。臭みと共に、白い湯気が上がり、縛られたシャロツテの膝にかかった。

「……最悪」

鼻を押さえる男達の言葉が投げかけられる。

嵐のような罵詈雑言。だが、女海賊の耳にはもう届かない。





パンッパンッパンッ!

そんな景色の下でアルーピアを始めとする『蒼海の槍』の仲間達が犯されていた。

大勢の男達に囲まれた上、肉奉仕を強制され、膣中に白濁液を流し込まれる。彼女達の口からは嬌声交じりの、悲鳴が上がっていた。

「そ、そんな……ひ、酷い。皆になんて事を……」

「酷い事って、何を言ってるんだ？ 俺達は気持ちがいい事をしてやっているんだ。酷い事など何もない。くく、すぐにお前だつてそれを知る事になるぞ」

あまりの光景に言葉を失うノアに対して喜色交じりに語りながら、バルは少女の両腕を片手で掴むと、空いた手でスパッツの股間部を引き裂いた。

「ひっ！ いやあっ！」

秘部が露にされる。ほとんど毛が生えていない若い女の部分。ただ、ワレメは無惨に開かれていた。ピンク色の肉襷が、外側に向かって捲れ上がっている。これまで受けた陵辱は若い身体にも激しい影響を及ぼしていた。濡れそぼった柔肉が蠢いている。

「お？ 何だこれは？ これは牝豚のアソコじゃないか。少しシヨックだなあ。だが、まあ仕方がないか。お前が俺の好みである事に変わりはないからな」

ベロンと伸びるバルの舌が、少女の頬を舐めた。舌の粒々と耐え難い口臭が襲ってくる。

「や、やつ！ やだあっ！」

「おうおう、その声が可愛いなあ」

悲鳴を上げても喜ばせてしまうだけだった。髭面男は歪んだ笑みを浮かべたまま、自らの肉棒を取り出す。ズボンから出しただけで、ただでさえ精液臭い周囲の空気が、より臭みを増した。

巨大な包莖ベニス。皮の間から僅かに見えるワレメには、黒ずんだ恥垢が見えた。

「さあ、挿入れてやるぞ」

床に寝かされ、無理矢理足を蟹股に開かされる。汚い男根が、ゆっくりと近づいてきた。

「だ、駄目だ！ ヤメロ！ ボクを離せえ！」

シタバタともがくのだが、海賊達によって肉体は拘束されてしまう。彼らの肉棒も剥き出しにされている。

ぴちゅっ。

肉先が秘裂に触れた。余った皮の感触。勃起が持つ熱気が伝わってくる。

「さ、触って——や、やだ、やだよ！ こんなやだ！ 助けて！ 助けてよ！」

触れた途端、少女の花弁は待ちに待っていた牡の存在に激しい反応を見せた。襜の一枚一枚が、それぞれ別の生物のように肉槍に絡みついていく。陵辱を受けた肉体は、変身を解いていても牡を求める。自分の肉体が自分のものではないようで恐ろしい。

「助けて！ 助けて下さい！ 船長！ 助けて！」

ほとんど半狂乱になって、シャロツテに助けを求めた。

「くく、船長か……あの女の事かな？」

嘲笑うかのように、敵が海賊少女の肉体を独眼の女海賊へと向ける。

「……嘘」

目に入ってきたのは信じられない光景だった。

じゅばんっじゅばんっじゅばんっ！

「ひひゃああっ！ ひいっひいっ！ すっごひ、後ろから突かれるの、すっごひいっ！

んじゅ、んじゅっ！ おいひい！ しえーしおいひいっ！」

上がる嬌声。後背からメツアクに肉棒を突き込まれた眼帯の女海賊。男の腰が尻に叩きつけられる度、湿った音が響き渡った。

じゅぐ、ちゆる、じゅるるう……。

「あへっ、あへっ……んぐ、んもうっ！」

後ろから突かれた状態で、シャロットは周囲に突き出される男根に、積極的に舌を絡ませていく。両手に掴んだ肉棒を抜き、積極的に舌を動かす。剥き出しになった乳房が、上下左右に激しく揺れる。

ノアの知っている船長とは、あまりにかけ離れた姿だった。

「ノアノアはホント、あたしがいないと駄目だよな」

そう言っ笑って欲しかった彼女の姿はどこにもない。

快楽に表情を歪め、独眼を細めている。瞳は潤み、淀んでいた。

「こんなの……こん——んぐっ！ ひぎっ！ あっあっああ……ああああっ！」

膾口に擦りつけられた肉棒に力が入る。肉槍がワレメを引き裂いた。ミシミシと巨棒が杭のように打ち込まれていく。

膾肉が拡張される。カリ首が肉襷に引っかかり、敏感な膾肉を削っていく。男根に巻き込まれ、媚肉が内側に捲れ上がる。蜜壺内に残っていた白濁液が、肉茎を伝って外側に流れ出ていく。

「きつつ、キツイ！ うあつ、大きい！ おつきいよ！ くるし、苦しいっ！ でも、やだ！ 何で？ ボクの身体、何でえ!？」

股が引き裂かれるような痛みが走る。ただ、感じるものは苦しみだけではなかった。

肉棒を挟み込む柔肉に、はつきりと感じる鉄のような硬さ。下腹部に尋常ではない熱気が広がる。覚え込まされた官能が、自分自身の身体にも甦ってきた。

自然と瞳を細めてしまう。うっとりとした表情。

「感じてるのか？」

耳元で囁かれる。

「ち、ちがつ！ そ、そんな事！ くひっ！ あるわけない！ あるわけないよっ！」

ずぶうっ！

半分ほどしか入っていないなかった肉棒がその瞬間——根元まで突き込まれた。

「うっはあああつ！ ひぎいいいっ！ は、挿入ってる！ 挿入ってふうっ！」

少女海賊の瞳が白目を剥く。身体は反り返り、背中と床が離れた。

痛々しいまでに秘裂が開かれる。ポロポロとノアの瞳から涙が零れ落ちた。

「いいぞ、凄い締めつけだ。すぐにも射精してしまいそうぞ」

なにやらバルが吠えているが、ほとんど耳には届かない。

「あうあううう……」

パクパクと口を動かしているだけ。必死に耐えようとしていた理性は、一瞬で奪われてしまった。

ビリッ！

唐突に髭面男の腕がシャツにかかり、布が引き裂かれた。小さな胸が外界に晒される。

肌は汗塗れになり、肉体に染み込まされた白濁液の精臭を伴った体臭を、周囲に漂わせた。

「くさっ！　なんだよこの匂い。このガキザーメンくせえ！」

露骨すぎる表現を使いながら、周囲の男達が肉棒を摺り寄せてくる。近づいてくる肉頭に、少女は屈辱感を覚えながらも無意識のうちに手を伸ばした。熱く、硬い肉の棒が掌に触れる。

(分かんない。もう……分かんないよ)

ちゆく……ちゆくちゆく……。

覚え込まされた性技を無意識に使いながら、男達の肉棒を扱き始めた。

「積極的なのはいい事だぞ。お前の頑張りを見ていたら、俺もやる気が出てきた。よし、いくぞおっ！」

ノアの動きに喜んだバルが腰を突き動かす。

「ひゃひっ！ 膺中で、膺中で動いてる！ 駄目！ うごひちゃ、駄目え！」

上がる悲鳴。巨根が膺壁を摩擦する。肉茎の微妙な凹凸が粘膜に絡み、カリ首が柔肉を削った。結合部から本能を猛らせる快楽が広がる。

「動くなといわれても、こればかりはどうにもならんぞお！」

繋がったまま、髭男は更に腰の動きを激しくしていった。

「くく、まさかこうして『蒼海の槍』に復讐する事ができるとはな。バルⅡバロス様々だぜ」

陵辱される海賊少女の姿を見つめて笑い声を上げたのは、これまで『蒼海の槍』が倒してきた海賊達だった。敗北後、この流刑島に流されてきた連中である。既に彼らも勃起した。ペニスを露出させていた。

男達を取り囲んでいるのはシャロツテである。『蒼海の槍』の中でも、彼らが最も恨んでいるのが彼女だった。

「このクソ生意気な女を、いつか犯してやるのが俺の夢だったんだ。取り敢えず、このムカつく眼帯を犯してやるぜ！」

一人が声を荒げると同時に、肉棒をアイパッチに押しつけ、腰を振り始めた。

先走り汁が眼帯に擦りつけられ、半透明の糸が伸びる。

「突かれてるっ！ あったひ、あたひ目を突かれて……うひっ！ ほおっ！ おほうっ！





や、やめつろ！ そこつ、そこはやめつろおつ！」

飲まされ続けた精液により、ほとんど理性を失っていた女海賊だが、自分自身の存在そのものであるともいえる眼帯に対する陵辱に、屈辱感を覚えたのか拒絶の声が上がった。

「やめろとは、今更何を言っているのだ？ ここに突つ込まれてヒーヒーよがっていたよ  
うな奴が！」

パアンッ！

膣に肉棒を突つ込むメツアクが、荒々しい言葉と共にシャロツテの尻を叩く。

「ひぎっ！ うおあつ！ ひぐっ！ うああつ！ おふつ、おふうつ！ め、目なのに、  
目なんかで、ひぐっ！ ひっちやうよ、ひっちやううっ！」

鞭で叩かれたような乾いた痛みが全身に走り、それがそのまま快楽に変換された。

肉棒の匂い。肉棒の硬さ。肉棒の熱。それらすべてを眼前に感じるだけで、女海賊の肉  
体は昂ぶり、絶頂へと駆け上がっていく。

「間拔けなイキ顔晒してるんじゃねえよ！ よしっ！ お前の糞生意気な眼帯に、俺の汁  
をくれてやるわ！」

ガハハとアイパッチに男根を擦りつけた男が笑う。

まるで膣でも突いているかのように、激しくグラインドする男の腰。これ以上ないとい  
うほどにカリ首が膨らみ――。

ドッピュルウウッ！

精液が噴出した。

「うあつ！ あつっ！ あつひっ！ あつひっ！ ぎ、ザーメンがかかっているうっ！」

ゼリーののような液体が、激しい滑りを伴って黒の眼帯を汚し尽くす。アイパッチを染めた牡汁が頬を流れ、口端から口腔へと流れ込む。

教え込まれた精液の味。自然と舌を伸ばし、口周りの液体を舐め取っていく。

「ああ、苦い……んちゅ、ぴちゅう……苦い……」

不味さを訴えながらも、女海賊の舌は動き続ける。

「最低だな！ この牝馬めえ！」

絶頂を迎えても、休む時間は与えられない。

パシンッ！ パシンッ！

挿入された肉棒の動きが速まる。

「は、はひゃひっ！ あ、あたしはあ、牝馬ですうっ！」

無意識のうちに罵倒に対して答えを返してしまう。剛直で膣奥を一突きされるごとに、ピュッピュッとシャロツテの肉棒から、精液が飛び散った。射精ではなく、失禁でもしているかのような勢いで、白濁液が飛び散り続ける。一回腰を叩きつけられる度、絶頂を迎えていた。

「でっへるうっ！ うほっ、ほあつ、ほああつー！」

ノアの耳にもはつきりと届いてくる。耳を塞ぎたくなくなるほど、墮ちた彼女の声を聞くの

は苦痛だった。

「やめつて！ あっあつあ、ああー！ お、お願いですから、せ、船長には手を、ひゅあつ！ 手をださつないでえ！」

泣きながら懇願するのだが、その最中も責めは止まらない。ガクンガクンッと玩具のように海賊少女の身体は揺れた。

亀頭でガツガツと子宮口を叩かれてしまう。ほとんどない胸まで揺れる。勃起した男根が、胎内で更に大きくなった。少女の小さすぎる蜜壺の許容範囲を巨棒は超えている。

「ひぎつ！ あべつ、ひぐつ！ うああ！ きつつひ、きつつひいっ！ いぐつ！ いっちやふうつ！」

突き入れ、引き抜く。一回一回の行動が、少女に限界を超えさせた。男根を動かされるだけで、肉体は絶頂へと駆け上がってしまう。

絶頂を迎える度に、思考は真っ白に染められていった。  
「くく……いいぞ、そろそろだ。本気でいくぞ！」

その言葉を吐いた途端、バルは自らのストロークを速めた。

「ひゃつ！ ぎゅあつ！ だ、だつめ！ ひいひいっ！」

パジュンパジュンパジュンッ！

拡張しきった膣口。肉棒が引き抜かれるのに合わせて、愛液が辺り一面に飛び散る。

「よし！ 私もいくぞ！」

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**